

タイの「開発の時代」(1958-73年)における開発思想 —官僚教育機関を中心として—

Ideologies on Development in Thailand in the Period of 1958-1973:
Study on Development Studies in an Educational Institution for Bureaucrats

河村 雅美*
KAWAMURA Masami

This essay is an attempt to analyze the ideologies on development in Thailand in the period of 1958-1973 through the study of an educational institution for bureaucrats.

Ideologies of development in Thailand in this period have been examined only through Prime Minister Sarit's policies and speeches. The purpose here is to study other ideologies of development through an examination of development studies in an educational institution for bureaucrats, i.e., the National Institution of Development Administration (NIDA), established in 1966 to produce human resources for national development.

We can see the following features in ideologies of development from looking at development studies in NIDA, especially in the public administration that supported the policy of making a "strong executive" to implement national development plans in the period. First, their thoughts were influenced by Fred W. Riggs, a famous American scholar and author of *Thailand: The Modernization of Bureaucratic Polity*. Thai scholars used his "prismatic society" model, which was presented as a framework to understand developing countries. The prismatic society model could explain the intermediate stage between traditional and modern societies. Secondly, their image of "Development" was as a changing system in all aspects including politics, administration, economy and society, not merely economic growth. Thirdly, they used a historical approach in analyzing their own problem of development. They did not regard their process of development merely as "catching-up" with developed countries. Fourthly, they were concerned with the impact on Thailand of the external world, especially the West; therefore, they emphasized the need to select what influences they should accept and reject. Lastly, as for the role of bureaucrats in national development, they expected them to become "change agent" altering the traditional society.

Compared with Sarit's ideas, there are different points in the image of development and the expected role of bureaucrats, while we can find some common ones, such as concern over the influence of the West. To discuss the development of Thailand, further studies about various aspects of ideologies of development are needed.

*一橋大学大学院社会学研究科

1 はじめに

本稿は、タイで「開発」という言葉が政策として使用され、一イデオロギーとして流通し始めた1950年代後半から1970年代前半の時代の官僚教育機関における「開発」をめぐる思想を明らかにすることを目的とする¹⁾。

この時期のタイの開発については、これまで政治経済学的な視点から論じられることが多く、その思想に関しては、「開発の時代」をスタートさせたといわれるサリット首相の開発に関する政治哲学に焦点が当てられ、サリットの演説の分析によって語られてきた部分が多い〔タック1989〕〔末廣1993b〕。しかし、開発思想には様々な諸相があったのではないかと考えられる。例えば開発を語る主体の面からみれば、それは為政者だけでなく、政策執行者である官僚にとっての開発、国王の語る開発、佛教界が媒介した開発、メディアが発信した開発等、主体および解釈の多様性があったのではないか。また、開発実践の場においても国における開発とローカルな場での開発など、それぞれの場で語られる開発があったと思われる〔足立1996〕〔町村1999〕。このようなことを考えると、サリットの開発思想は、様々な諸相の一位相に過ぎず、サリットの演説のみでタイの開発思想を語ることは不十分であろう。タイの開発の過程がアメリカの世界戦略のお仕着せ、あるいは「開発独裁」といった独裁者の政策といった面で論じられることは、末廣の「開発主義」の概念の提示などにより批判されてきたが〔末廣1998a,b〕、その批判をより実証に基づくものとするためにも、開発の個々の相を掘り起こし、重層的な面を示すことが必要であると考える。

また、他地域との比較で考えると、ラテンアメリカ、南アジア、アフリカなどではディスコース（言説）研究として、開発思想を分析する試みがある〔Escobar 1995〕〔Crush ed. 1995〕〔Ferguson

(1990) 1997〕。タイでも、その分析手法の紹介がされているが、具体的な分析研究までには至っていない〔Chairat 1999〕。桜井は問題提起や〔桜井1995〕、開発僧を対象とした開発言説研究にとどまっている〔桜井1999〕。むしろタイではオルタナティブな開発、脱「開発」などといった「開発」の対抗概念についての言論が多く²⁾、批判対象である「開発」の思想を歴史的に分析した上で語ったものはいまだ少ないので現状である。その結果、オルタナティブな開発論は「タイ的なもの」を軸にする開発と西欧からの侵略的な開発の二項対立的な開発論に陥りがちであり、タイ自らが開発を受容した過程を見落とす結果となる。タイ研究においても、開発を思想として相対化し、分析する作業が必要であろう。それによって、開発研究をタイの枠内のみに閉じこめるのではなく、地域、あるいは世界史におけるタイの開発を論じることができると考える。

本稿ではそのような開発思想の諸相を探る一步として、「開発の時代」³⁾にタイの「開発」思想を支えた知の領域に焦点をあて、その中でも官僚教育における「開発」思想を分析対象とする。タイの開発思想については、上述のとおりサリットの演説などによる分析に偏っており、開発政策を支えたとされる官僚についても、詳しい分析はされていない。それを官僚教育の中から見いだすことを試みる。この「開発の時代」は「強い行政政府」による開発政策遂行が目指されてきたが、それを支えるための官僚教育訓練の中で「開発」はどのように流通していったのか。この時代の開発途上国の学問は、アメリカの学問の模倣であった、あるいは大きな影響があったといういい方をされるが、何が模倣されたのか、どの部分のコピーであるのか、またタイはどのようなコンテクストでその部分を採用し、受容していったのかという問い合わせに答えることが本稿の目的である。

まず、2節で開発に関する学問分野を結集し、

官僚の中にビルトインしていく教育機関であった国立開発行政研究所（National Institution of Development Administration: NIDA）の概要について述べる。3節ではNIDAをめぐる人物の思想、およびNIDAでの教育内容をとおして、官僚教育の中で「開発」がどのように認識されていったのかを分析する。最後に、サリットの思想との比較を試み、むすびとする。

2 NIDAにおける開発学

ここでは、開発学の中から開発思想の抽出を試みる⁴⁾。本稿では開発学と総称される開発に関する学問分野を結集し、官僚の中にビルトインしていく装置であったNIDAの中にみられる開発思想に焦点をおき、その分析を行う。NIDAの組織としての概要をこの節で述べる。

NIDAの前身はピブーン政権時の1955年にタマサート大学内に設立された行政研究所（Institute of Public Administration: IPA）である。アメリカの援助プログラムにおける行政上の効率化を目的とした、行政学としてはタイで初の大学院レベルの官僚の研修機関であり、アメリカの国際協力局（International Cooperation Agency: ICA）の援助とインディアナ大学の協力により設立された。この設立には内務省高官のマーライ・ファナンが関与している。マーライは、フィリピン大学で修士を取得後、アメリカのミシガン大学で、タイで初めてアメリカの政治学の博士号を取得した官僚であった。また、チュラロンコン大学政治学部の創設に関わり、タマサート大学政治学部の学部長を務めるなど、タイの主に政治学の分野で影響力を持つ人物であった⁵⁾。

その後、アメリカの比較政治学の中で、援助政策の中に開発のための「開発行政」が必要であるとの考え方が生まれるとともに、タイにおいても開発政策の中で経済開発を遂行する人材開発の必要性が認識された。サリットの側近であり、国家

経済開発庁副長官、開発省副大臣を務めたブンチャナ・アッタコーンが1962年オーストリアで開かれた行政学の国際会議の報告書の中で国家開発のための人材養成機関の設立を提案し〔Krom Witheet Sahakaan Kraswang Phatthanaakaan haeng Chaat 1966: 1-20〕、IPAを発展させる形で大学院大学であるNIDAが1966年に設立された。アメリカからは引き続きインディアナ大学、およびフォード財団の大きな支援があった。ブンチャナは初代学長（1966.4-1967.12）、マーライは2代目（1967.12-1971.12）を勤めた。

学部はIPAの組織をタマサート大学から継承した行政学部、民間部門の育成、民間のビジネス部門の高い管理能力をもった人材育成のための経営学部、国家経済開発庁（National Economic Development Board: NEDB）の開発経済研修プログラムを前身とした開発経済学部、および国家統計局の統計研修プログラムが発展した応用統計学部の4学部で構成された大学院であった。学生はフルタイムを原則としており、1968年から1975年のNIDAの学生の職業をみると、入学前の64.4%および卒業後の80.3%が官僚であった。学生は学部を卒業してから4年以内に入学しているものが約7割を占め、年齢も30歳以下のものが77.6%であり、卒業後、中間管理職の候補となる若手官僚の実質的な教育を担った機関であった⁶⁾。

このように、NIDAは国家開発という特定の目的のために新たに設立された機関であり、学部構成からみられるように、開発を目的とする学問分野を集めさせて官僚教育を行った大学院レベルの機関であった。ゆえにNIDAによる開発学には、他の教育機関よりも当時の開発思想が明確に示されていると考え、本稿での分析対象とする。

3 NIDAにおける開発思想

それでは、NIDAにおいて、どのような開発思想が伝えられようとしたのか。NIDAに関わる人

物の思想、NIDAでの教育内容などをとおしてそれを明らかにすることを試みる。

ここでは、NIDAの中で中心的役割を果たしている行政学部に焦点を置く。これまで、開発政策とともに言及されるのは専ら経済学であり⁷⁾、政治学的な知の領域にはほとんど触れられることはなかった。しかし、開発思想の流入の経路には、経済学出身のテクノクラートからだけではなく、行政学系の開発思想も存在していた。1950年代後半から、アメリカは途上国問題の見方に変化が生じ、市場原理や民主主義重視の立場から、途上国の開発には強力な政府の存在と機能が不可欠であるという認識に変化していき[李 1996: 220-221]、NIDA設立の目的である国家開発のための人材を育成する「開発行政」の概念も、その認識の上有る開発学の「輸入」であった⁸⁾。「強い行政府」を確立するための、開発計画の立案等を行う官僚機構の拡大といった行政制度の改革は、行政学の傾向に基づいていたことがタマサート大学政治学者サニー・チャーマリックにより指摘されており[Sanee 1994: 198]、国内外で開発思想を支える一分野であったといえる。また、地方開発のための郡長などへの官僚教育にもNIDAの行政学部は影響を及ぼしている [河村 2000: 135-137]。チャイラット・チャルーンシーオーラーンも比較政治学が「開発学」の一つであったことについては述べているが [Chairat 1997 : 195-197]、タイにおける開発学としての、行政学を含む比較政治学についての内容の分析までは至っていない。本節ではNIDAの行政学部における開発をめぐる思想の抽出を試みる。

(1) タイの位置づけと「開発」のイメージ

1) リッグスの発展史観の影響

タイにおける開発を文脈とした自己認識、およびイメージ形成は、どのような発展史観によるものであったのだろうか。この時代の開発途上国

例にもれず、タイもアメリカの学問に大きく影響された。特に比較政治学の中の比較行政グループ(Comparative Administration Group: CAG)の会長であったフレッド・W・リッグスの影響は大きかった。リッグスはタイの政治論における中心的概念である「官僚政体」論を提倡したことでも知られているが、タイにおける開発思想形成にも一定の役割を果たしていた。CAGは1960年アメリカ行政学協会(American Society for Public Administration: ASPA)内に設立された⁹⁾。冷戦初期の開発途上国援助がTVAのような1930年代のアメリカの経験に依拠しすぎた、部分的な技術移転による援助であったために効果を生まなかつたことへの批判から、途上国理解のための比較行政の教育・研究が始まり、CAGがフォード財団の支援を得て活動を始めた。CAGの研究の焦点はNIDA設立の際の中心概念となった「開発行政」であった。「開発行政」は基本的には大規模な組織、特に政府が開発を目的とする政策や計画を遂行するために打ち出された概念であった [Riggs 1971a: 6]¹⁰⁾。

リッグスのタイとの関わりは、1957年から1年間に渡り、アメリカの社会科学研究評議会(the Social Science Research Council: SSRC)内の比較政治委員会の助成を受けてフィールドワークをしたことから始まる¹¹⁾。当時、リッグスはインディアナ大学に所属しており、同大がタマサート大学の行政学研究所設立のための協力をしていたことがタイを選んだきっかけであったという。この後、リッグスはフィリピンに滞在するが、この経験を基に、途上国理解のモデル化が進められた。それをまとめたものがNIDAでも教材として使われた『タイ社会研究のためのモデル (A Model for the Study of Thai Society)』 [Riggs: 1961a] や、『行政のエコロジー (The Ecology of Public Administration)』 [Riggs 1961b] である。

このリッグスの思想をタイの「開発」と結びつ

けて「開発学」の領域に取り入れたのは、アモーン・ラックサーサットであった。アモーンはチュラロンコン大学政治学部を卒業し、国防省国土防衛部官僚からIPAを経て、インディアナ大学で学位をとり、NIDAの行政学部の中心的役割となった人物である [Uthai, Prathaan n.d.: 372]。アモーンは1962年、ハワイ大学東西文化技術相互交換センター附設の上級プロジェクト研究所が開発行政研究のため招聘した上級研究員の一人であり、他に招聘されていたリッグスや、ベトナム、フィリピン、日本などからの研究者と開発行政に関する意見交換などを行った [Amoon, Khattiyyaa eds. (1965) 1972: [6] - [7]]。「開発」という概念に触れたのは、このハワイ大学における研究員の時であったとアモーンは述べている¹²⁾。

その後、この経験に刺激を受けて、アモーンがコーディネーターとなり、タイで1964年「国家開発理論と思潮」についてのセミナーが開催された¹³⁾。セミナーの参加者には、中央銀行総裁プオリ・ウンパーコン、前述のブンチャナ・アッタコン、アムヌアイ・ウィーラワン（後の大蔵大臣）、NEDB副局長サノ・ウーナークーン（後の国家経済社会開発庁事務局長）、政治学者ソムサック・チュートー（チュラロンコン大学教授、後の副学長）、政治学者サネー・チャーマリック（タマサート大学教授）などの名がみられる。このセミナーは「開発の過程」「開発行政」「政治における開発」「社会における開発」「経済開発」など、幅広いテーマで行われたが、その中で、リッグスの理論について一セッションを費やして議論している。このことから、この時代、リッグスがタイの開発観に非常に影響があったといえるだろう。

また、当時のNIDAの教師からの聞き取りによると、リッグスの著作はNIDAの教材としても使用されることが多かった¹⁴⁾。NIDAの行政学部の教師をしていたチャイアン・サムットワーニットも回想記の中で、NIDAにおける使用教科書が、

タイの政治行政の教育にも関わらず、ディヴィッド・ウィルソン、リッグス、ウイリアム・シッフィンによるものであったことを批判的に自著で挙げている [Chaianan 1997: 313-314]。

リッグスの理論の中で特に注目されたのが、プリズマティック社会 (Prismatic Society) の理論である。プリズマティック社会とは、リッグスの途上国での研究から作られたモデルである [Riggs 1961a] [Riggs 1961b] [Riggs 1999]。このモデルもアメリカを近代社会のモデルの一つとした発展史観のひとつに過ぎないが、当時は2点の新しさがあった。1点目はこれまでの、伝統・近代社会の二分法へのアンチテーゼとして、伝統社会から近代社会へ移行する中間の段階である過渡的社会をプリズマティック社会としてモデル化した点である [Riggs 1961a: 9]。リッグスは途上国において西欧の制度を模倣したものが導入されているにも関わらず、それが機能していないことに着目し、構造-機能主義をベースにした途上国理解のモデルとしてプリズマティック社会モデルをつくった。2点目は、リッグスは行政技術の部分的移植を行ってきたアメリカの援助方法に懷疑的だったので、行政と社会全体の環境との関係を重視した生態 (ecology) 的アプローチを取っている点であった [Riggs 1961b: 1-4]。

リッグスは伝統社会、移行社会、近代社会を光の比喩で表現し、それぞれを融合社会 (fused society)、プリズマティック社会、分化社会 (refracted society) と名づけた [Riggs 1961a: 9] [Riggs 1961b: 93-95]。伝統社会は機能分化がされていない、光でいえば白光の状態であり、近代社会は虹の色のようにはっきりと機能分化がされている。その中間の、白光を分化させようとするプリズムの比喩を用いて、移行時の社会をプリズマティック社会と位置づけた。この段階は、伝統社会の遺物が残存しているが、近代社会の制度が導入されている段階であり、構造-機能主義的に

いえば、社会集団は伝統社会よりも多くなっているが、それぞれの機能が果たされていない、構造と機能間に混乱が生じている状態である。プリズマティック社会の大きな特徴は近代的な制度が導入はされてはいるもののそれらの制度が適正に機能しない形式主義（formalism）にあった。

タイの政治研究で大きな影響力を持ってきた「官僚政体」の概念が提唱された『タイ：官僚政体の近代化 (Thailand: The Modernization of a Bureaucratic Polity)』[Riggs: 1966] もこの文脈で書かれたものであり、タイにおいてもこの時代、タイの政治行政に関心を持つ者が読むべき「經典」(Khampii) となった [Chairat 1997a: 37]。NIDAのパイブーン・チャーンリアンは、リッグスの研究が行政者に行政の障害となるものは何かを認識させ、それを行政者自身が解決すべきであるという考えをもたらすことから、タイ官僚制度の理解に重要なものであると述べている [Phaibun 1971: 30]。このように、リッグスの研究は、タイの政治行政の特質が書かれたものとして読まれただけではなく、タイの政治行政の発展の手がかりとして、読まれたものでもあった。

2) 「開発」のイメージ

リッグスのモデルから影響を受けて形成されたタイの開発観は、開発を単なる経済成長ではなく、システム、制度、価値、考え方そのものの変化としてとらえるというものであった。これはリッグスの生態的アプローチが影響している。上述の「国家開発理論と思潮」のセミナーを幅広いテーマでおこなったのもリッグスの思想を体現したものである、とアモーンは述べている [Amoon (1965) 1972: [7]]。

ここで、アモーンの著作からリッグスの影響をみてみることにしたい。アモーンは『開発過程』と題する論文の中で開発概念の整理の必要性を指摘した上で、リッグスの開発の概念を紹介し、開発を成長 (growth)、変容 (transformation)

とは区別をすべきだと論じている。開発とは、環境や生産レベルの変化ではなく、システム自体の変化であるというリッグスの開発概念¹⁵⁾、および、そのような開発概念に基づいた「開発」「半開発」「未開発」という分類を紹介している。これは、それが近代社会、プリズマティック社会、伝統社会と対応している。この「開発」の分類によると、「開発」の状態とは、経済的には市場による合理的な価格設定が行われ、社会的には自由と平等の精神が重視され、政治面では国民が市民権を持ち、行政面においては法による統治が行われている状態であるという。一方、「未開発」の状態では市場経済は存在せず、互酬性の経済を営んでおり、社会面では集団は排他的であり、神權による政治が行われ、行政においては法ではなく、儀式が重視されるという。「半開発」社会には二種類あり、一つは他社会からの開発の影響を受け、それによって開発を進めていく擬似開発型、もう一つは独自に自社会の資源を用いる半開発型であり、タイは前者であるとしている。擬似開発社会は、経済面においては擬似市場経済であり、利益を得るために投資ではなく、まず政治的な影響力を持つ者の支援を得るために金を使わなくてはならない。また、このような社会では、商業活動が低くみられ、商業活動は、その土地ではエリート層になれない中国人、インド人などの外国人の手中にあるという「パーリア企業家」型のものである。社会的にも実力主義は形式のみで、流動性に乏しく、政治的には憲法、国会、政党、裁判所などの制度は存在していても、機能を果たしておらず、国民は選挙権を正当に行使できない。行政においても近代的官僚制は存在していても、官僚は私利私欲に走り、商人と結託して知識人が建設的に知識を使うことを妨害しようとする、という擬似官僚制の状態になるという [Amoon (1965) 1972: 1-23]。そして、経済、政治、行政などのあらゆる面がともに開発されなければその成果がで

ないとアモーンは論じている [Amoon (1965) 1972: 29]。

それでは、タイの文脈で考えた開発のイメージとはどのようなものであったのか。アモーンは以下ののような例をだして説明している [Amoon (1965) 1972: 28-29]。開発社会では、K氏 (Naai Koo) が食料品店を小さな村で営む場合、市場経済の原則によって行われるのでK氏は原価も経費も知り得ることができ、生活も安定し社会的に商人だからといって忌み嫌われることなく平等であることができる。そして市民として権利義務を持ち、選挙で票を投じ政党員になることで行政への参加もできる。それは自身の利益に関わること、例えば彼が住む地方自治体（テーサバーン）がナムプラーの税金を引き上げようとする時には、K氏は抗議をすることができ、代議員は選挙のためにK氏の意見を考慮しなければならない。最終的にK氏が新法により税を払わなければならない場合はテーサバーンの官僚が、速やかにそれをK氏に伝える。K氏は完全なる市民であるので、官僚がK氏から賄賂を要求するためにわざと仕事をしないということはないだろうし、官僚が不正をした場合はテーサバーン議会、あるいは公選で選ばれた議長に申し立てを行うであろうと、想定している。そして、「この例から、K氏が正直に商売をし、弱い者いじめをする者がいなければ、K氏は自分自身の商売を経済の範囲内で考えればよいことがわかる。もし、次々と賄賂のような経費を費やすなければならないのなら、K氏は未だ開発していない社会の特徴のとおり、権力者の影響に依存し、違う方法で安定を求める者になってしまうだろう」とまとめている。[Amoon (1965) 1972: 29]。つまり合理性の高い開発社会に向かうには、経済、社会、政治、行政の全ての面が共に開発されなければならず、それが達成された状態が上述の状態であり、開発がされていない状態は、あらゆる面で不合理性に悩む状態といえよう。

このような開発の状態は、後に第6代学長を務めるティッタヤー・スワンナチョットの見解からもみることができる。ティッタヤーは『タイ社会における変化』において、

開発した状態というのは、社会の構成員が知識や能力を、政治面での圧迫、経済面での圧迫、衛生面の不十分さというようなものに支配されることなく、十分に発揮できる状態である。全ての者が自分の可能性を人類あるいはその社会を脅かすことのない限り、発揮し成果ができるようにすることである。 [Thittayaa (1965) 1972 : 631]。

と述べている。

社会全体の不合理な状態を排除することが、開発のひとつのイメージとなっているといえよう。つまり、開発のイメージは経済成長のみを優先させたものではなく、システム全体の機能分化の結果、合理性が実現された民主制の状態であり、「開発」は、民主制と優先度を競うものではなく、民主制を内包したものであった。

また、タイの開発に関しての自己認識は「先進国／低開発国」の序列の中ではなく、タイの歴史における通時的なイメージの中で認識されるものとなった。

マーライ・ファナンの右腕とされ、NIDAにおいても中心人物の一人であったチュップ・カーンジャナプラコーン¹⁰⁾はリッグスのプリズマティック社会の枠組みにより、タイの開発行政を分析した [Chup (1965) 1972: 197-231]。彼の『開発行政：リッグスの方法に基づいて』と題する論文はタマサート大学政治学部50周年記念論文集の中の一つに選ばれており [Nakharin 1999: 231-275]、この時代の論調をある意味で代表する論文として高く評価されているといってよいだろう。チュップもリッグスの理論の枠組みに基づいて、タイの移行社会期の分析を試みている。チュップはプリズマティック社会の前段階がラーマ4世と5世の

初期の時代であり、プリズマティック社会はラーマ5世の時代に始まったとみなしている。そして、プリズマティック社会におけるプリズマティック行政の問題として、原則や法よりも個人や関係を重視する形式主義、ジェネラリスト型の権力志向の官僚など、タイの新旧政治行動の軋轢という問題を分析している。

そして、上述のような開発のイメージである合理的な状態も、先進国の状態に求めるのではなく、タイ自身の歴史の中の理念に求める方向にあった。先進国との比較により、タイ社会に欠如しているものを求めていく分析ではなく、タイでは制度や形式は確立されているが、それが達成されないのはなぜか、という内向きの分析となる傾向があったといえる。

例えば、パイブーン・チャーンリアンは、NIDAで彼が担当した「タイ社会と行政」という授業をもとにして『タイ社会の性質と行政』という本をまとめており、タイ社会の移行による政治、行政への影響をリッグスの論に基づいて分析を進めている [Phaiboun 1971: 4]。ここで、タイ社会制度の開発への影響、特に政治、行政の開発に対してタイのそれぞれの社会制度がいかに役立つか、またいかに障害となるかを分析している [Phaiboun 1971: 13-24]。パイブーンは、社会制度として、国王、国会、政党、仏教、慣習・文化を挙げて、当時の、すなわち移行社会期におけるそれぞれの役割と開発への障害について分析しているが、それぞれの制度を歴史的にさかのぼり、各々が本来の機能を果たしているか否かを分析していくのである。例えば、国会に関しては軍部の権力闘争により機能を果たさず、政党は、少数のあるいは官僚界に限られた者の事柄であり、国民の代表という義務を果たさないため、国民が政党よりも個人に関心がいき、本来の機能を果たしていないことが開発の障害になっていると分析している [Phaiboun 1971: 16-19]。

3) 受容と抵抗

しかし、「開発」の概念が無条件に肯定的に受容されたわけではない。「開発」は外部からの概念であり、それが価値観等を含むあらゆる面での変化ととらえていたために、それを受けとめ、内容を取捨選択する能力の必要性の言及が多々みられる。

チュップは、タイが伝統社会から、プリズマティック社会を経て、近代工業社会へ移行する過程において外部世界、特に西洋の世界から「何を受容し、何を拒絶すべきか」を判断するべきである、と述べ、その「受容能力」と「拒絶能力」の重要性を述べている [Chup (1965) 1972: 216-218]。また、開発行政の今後の課題の一つとして、「変化しつつある、またこの先も進歩していく新しい形の社会において、タイらしさの特徴を保持するかたちで、新しい計画にそった行政のテクニックを用いる上で役立つような新しい考え方をとりいれるように官僚の精神や考え方を改善していくにはどうしたらいいか」というように、タイらしさを保持していくことの注意を促している [Chup (1965) 1972: 231]。

ティッタヤーも「開発した社会は西洋型の社会の性質を持たなければならないわけではない。タイは、さまざまな意味で西洋の社会とは異なった形や特徴で開発されていくであろう。」とタイ型の開発を予想している [Thittayaa (1965) 1972: 630]。また、チュップと同様に、「社会が開発するかしないかは、社会が滞りなく、あるいは地方の文化と摩擦をおこすことなく目的を最大限に達成するために、開発の手段として他の社会からの文化を選択して変えていく社会の能力にかかっている」 [Thittayaa (1965) 1972: 649-650] と、タイの外部からの影響を取捨選択する能力が必要であると主張している。

アモーンも第二次世界大戦後、西洋の模倣は全ての面で広がっていると否定的に述べている [A

moon (1965) 1972: 928-929]。そして、西洋社会は過度に賞賛すべき社会ではなく、タイ人はタイ人の独自性があるのだから、精神や国の状態、環境に適した独自の開発の目的と哲学を持つべきであると主張している [A moon (1965) 1972: 1003]。

伝統的なものが未だ混在し、機能分化によって開発の状態へと移行する過程である「移行社会」の枠組みは、外部からのインパクトによる急進的な変化を嫌うタイには、受け入れやすい開発理論であったと思われる。学問的な出来事で、象徴的な例として1966年に、ジョセフ・サットンが編集した論文集『タイにおける政治と行政の問題 (Problems of Politics and Administration in Thailand)』の中で仏教が冒瀆されていると物議をかもしたことがあった [Samnak Bannasaan Kaanphatthanaa 1966]。これはIPAで使用されていた教科書であり、リッグスも含むインディアナ大学の教授の論文が収められている [Sutton ed. 1962]。ここでサットンは、タイの官僚の行動志向が仏教の教義に影響されていることを批判的に書いており、これがアメリカ人教師による仏教の冒瀆として新聞紙上をにぎわした。このような意識を持つタイ側にとって「移行社会」という枠組みは、タイ固有の伝統的な要素と考えられるものを排除せず、否定しないという面で受け入れやすかったのではないかと考えられる。

(2) 官僚の開発における役割

－変化の担い手 (Change Agent)－

それでは、「開発」の状態に達するために官僚はどのような役割を果たすべきであると考えられていたのか。

NIDAの目的は開発の時代にふさわしい官僚を育てることであったが、それはどのような官僚であったのかをまずみてみると、ここでのキーワードは、「変化の担い手」(Change Agent)¹⁰ であっ

た。これは当時のNIDAの教師への聞き取りにおいても、共通認識であったことを確認している¹¹。1970年のカリキュラムには、カリキュラムの目的の一つとして

問題解決において近代的行政の知識を応用できる資質を持つ学生を育てる。卒業生に期待される役割は、全ての部門における「変化の担い手」(change agent)としての役割である [National Institute of Development Administration 1970: 1]。

と記してある。また、アモーンも『行政学部 教師活動指導』で「NIDAは変化の担い手、また国家開発の過程において重要な歯車としての役割を持った中級レベルの開発行政官をつくる」[A moon 1969: 33] と、記している。

サニット・サマッカーンはNIDAの定期出版物『開発行政ジャーナル』の「開発行政用語解説」欄で「変化の担い手 (Phuunam Khwaam Plienplaeng)」についての説明をしている [Sanit 1967: 163-167]。この言葉はもともと応用人類学、農村社会学が農村開発について論じる際に、文化の変容に着目し、使用したものであったという。この言葉はリッグスからの引用ではないが、アメリカの開発行政学で使用されており、チャッククリット・ノーラニティパドゥンカーンは「開発行政学のカリキュラム開発 一NIDAの行政学の事例研究」の論文で自身の学位を取得したピツバーグ大学のソウル・M. カットの論文からこの言葉を引用している [Cakrit 1969: 232]。カットは開発行政者の役割として、必要とされる知識における「専門家 (expert)」、「変化の担い手 (change agent)」、「近代化のエリートの一員 (member of the modernizing elite)」、そして、近代化集団の代表であり、恵まれない人々の代弁者である、開発のイデオロギストを挙げている [Katz 1968: 530-538]。ここでは、「変化の担い

手」は問題等を分析する能力だけでなく、関わる人々に役立つ関係を維持し、変化の過程の方向付けに助力する能力がなければならない、としている [Katz 1968: 532]。NIDAの『開発行政ジャーナル』に「変化の担い手としての開発行政者』を寄稿しているニューヨーク大学の行政学者キース・M・ヘンダーソンは、「変化の担い手」を、計画された変化の「中間人物（“man in the middle”）」、「触媒者（catalyst）」と位置付け、法、規則、政策、慣習、姿勢、信条、規範といった既存の制約を変えていく存在とみなしており、「もし彼が意識的に開発を促進させようとしたら、既存の制約の中でできる限り効率的に働き、害がある場合、その制約を変えることを試みる。」と述べ [Henderson 1967: 157-162]、既存のものと新たなものの媒介となる仲介者との認識を示している。NIDAではこの「変化の担い手」という言葉に、開発の時代にふさわしい、新しい官僚像を託したのである。これまでの行政者の規範は「法と秩序による安定」と「効率」であったが、「開発」そのものを新しい規範として考えなければならないことを提唱し [Amoon 1963: 408-410]、「開発」には、「維持」の任務よりも、「変化」の任務の能力を持つ官僚制度が求められたのである。開発の時代における変化の実行者が「変化の担い手」であった [Uthai 1986: 13]。

ではその「変化」の内容はどのようなものであったのか。ここでは変化とは考え方、世界観、信条を変えることを意味していたといえよう。既存の考え方、世界観、信条が、開発を進める上での制約、障害であった。サニットは物質的な変化ではなく、考え方、世界観、信条の変化が先になくてはならないという見解を示している。もし、道路、ビルを建てるといった物質的な変化が、その効用を受ける国民が参加せずに、あるいは政府、民間に関わらず外部の援助があつて建てられたということや効用を受ける者自身が維持していく責任が

あることを自覚せずに行われたならば、誤解や間違った考え方方が国民に生じることになってしまい、援助慣れ、自立精神の欠如という結果を招くことになるという [Sanit 1967: 163-164]。

また、パイブーンは移行社会期における役割と開発への障害について述べているが [Phaiboun 1971: 13-24]、ここで問題としたのは、タイの慣習・文化の中で政治を統治者のものとみなし、民主制を達成するために必要な国民の政治参加を阻むこととなる国民の価値観であった [Phaiboun 1971: 21]。このような国民の価値観を含むタイの慣習・文化が行政や開発を抑制するものになってしまっており、国家経済開発計画策定にも、国民の考え方、慣習・文化、価値観についても考慮するべきであるとし、続いて「変化の担い手」の重要性を述べている [Phaiboun 1971: 23-25]。

サニットは、「『開発の時代』にある現在の世界において、人間社会の大半が『変化の担い手』の行政を強く求めている」と「変化の担い手」の必要性を述べ、タイについて、「もし官僚の多くがこれまで述べたような『変化の担い手』の役割を示せば、タイの開発は今よりも速やかに進むだろう」とその必要性を説いている [Sanit 1967: 167]。このように、「開発」は考え方、価値観などを含む幅広い面での変化を意味し、官僚がその変化を国民に起こす役割を担うことが期待されていたといえよう。

これは具体的には地方開発における官僚の役割が念頭に置かれていたようである。一般的に個人が所属する集団のリーダーが「変化の担い手」とみなされており、宗教家、教師などもここには含まれていたようであるが、成人なども含め、国民をあまねく包む集団は地方行政の単位であり、変化のチャネルとしては官僚が唯一の存在であったといえよう。また、チャイアナンの回想によると、NIDAの政府への協力者といわれる学者は、学者同士が協力しなければ軍部に行政を牛耳られるこ

とになってしまふという意識をもっていたという [Chaianan 1997: 342]。ゆえに官僚といつても「変化の担い手」のイメージは軍ではなく、文官に限られたものであった。実際、パイプーンは上級行政職の教育を行う行政学校などでも講師を務めていたが、「変化の担い手」の具体例として開発指導員 (Phatthanaakoon) のケースを分析しており [Phaibuun 1971: 25-29]、ティッタヤーも『開発指導員：開発指導員、村落開発委員会および郡レベル官吏の役割の期待』において開発指導員に「変化の担い手」の役割を期待している [Thittayaa lae Koongwichai lae Pramoen Phon Krom Kaanphatthanaa Chumchon 1967: 7]。また、サニットは「変化の担い手」に必要なこととして、専門知識や人間関係の技術に加え、働く場所となる地方の慣習などを正しく学ぶことが重要である、と指摘している [Sanit 1967: 167]。このようなことから、具体的には、地方の国民に変化を起こす役割が官僚に期待されていたと思われる。NIDAの行政学部の学生は、卒業後、地方官僚として派遣されることが通例であり、開発への変化を担う者のリーダー的役割が彼らに託されていたといえよう。

4 むすび

ここでは開発思想の一位相である官僚教育における開発概念の分析を試みたが、これまで分析されてきたサリットの開発思想と比較してみると、いくつかのことがみてくる。

例えば、末廣は、サリットが開発を、工業化を軸とする経済開発だけではなく、「上からの社会変革」を意図していたと分析している [末廣 1993a: 35-44]。サリットは演説で「開発には経済、教育、行政、あらゆるもの開発が含まれる」 [Khana Ratthamontri 1964: 146] と語っているように、「開発」をさまざまな面を含んだ変化ととらえており、多方面に渡った開発政策を遂行

している。これは、NIDAの官僚教育において強調されていた開発を幅広くみる思想と共通した点であるといえよう。

また、西洋思想受容への部分的抵抗も共通する点である。サリットは外国で教育を受けていない「国産」の指導者であり、西洋から借用した政治概念に懐疑的であり、タイ的なものへの回帰を強く求めていた。多くが欧米留学の経験を持ち、アメリカの影響を大きく受けた教員も全面的な欧米受容ではなく、むしろそのインパクトへの警戒があった。

しかし、開発の達成されたイメージにはズレがあったといえよう。サリットが思い描く開発のイメージは「秩序」であり、『タイ——独裁的温情主義の政治』でサリットの政治体制の詳細な分析を行ったタック・チャルームティアロンによれば、サリットの開発の最終目標は本質的に行政を容易にすることにあり、参加の拡大、政治的動員、新しい政治制度の建設といった政治的意味での発展は、サリット体制の目標にはまったく入っていかなかったという [タック 1989: 274]。しかし、NIDAにおいては開発のイメージはあらゆる面での「合理性」を目指したものであった。本来、「合理性」は必ずしも民主制を含むものではないが、NIDAにおける開発思想においては、市場経済の原則などとともに、民主化が前近代的な伝統社会の不合理さを排すための手段として考えられていた。社会の不合理を克服するため、民主化により合理性の高い社会を目指すということが政治的意味での発展ととらえられ、それがNIDAにおける人々の開発のイメージに含まれていたのである。また、開発をあらゆる面での変化と考えることにより、その影響の大きさ、特に負の影響もイメージされていた。開発がシステム全体の変化であるため、成長や変容よりもその社会的影響が大きく、社会の分裂が起こることを予想し、開発のペースを徐々に進めることが適切な戦略であるとアモー

ンは述べている。また、それをコントロールする役割が行政府にあるとまで指摘している [Amoon 1972 (1965): 30-33]。

開発のイメージに付随して、官僚の役割に関しても相違点がみられる。サリットは、保守的な社会階層観を持っており、政府（ラット＝ラッタバーン）、官僚（カーラーチャカーン）、国民（プラチャーチョン）の三層からなる横断的な国家観を持っていたとされている [タック 1989: 197]。サリットは演説で地方官僚に向け、「諸君は私が国民に向かた耳、目、そして心であると考えている」と語り、それをタックは「政府官僚制は、サリットの慈悲深い独裁政権の忠実なる下僕でなければならなかった」と分析している [タック 1989: 198]。サリットの思想においては、サリットがイメージする「秩序」を実現することが官僚の役割であったといえよう。しかし、NIDAの開発思想においては、官僚は「下僕」ではなく、「変化の担い手」としての役割が期待された。これは国民に対して啓蒙的な役割を持つことを意味し、横断的な国家観としては共通するところもあるが、開発のイメージがあらゆる面での「合理化」であり、そこに手段として民主化も含まれているというサリットとの違いがあるため、官僚の役割も、サリットの考えた「下僕」よりは主体的なものであったのではないかと思われる。

このように、「国家」と括られる中でも開発思想は一枚岩ではなく、「体制側」といわれる教育機関とサリットの間にもギャップがあり、単に「開発独裁」「経済成長第一主義」という括り方をすることはできないであろう。教育機関においても、経済テクノクラートがどのような開発思想を共有していたのか、ということについてはまだ分析が必要であると思われる。「アメリカの期待する工業化政策に近いもの」 [末廣 1993b: 55] であったのか、また、「生産」のイデオロギーというものはどの部分で担われていたのか、という検

討が求められる。

本稿は、開発思想の一位相に焦点を当てたものであり、様々な相のさらなる分析が必要である。また、研究の進んでいるラテンアメリカ等、他国との比較も今後タイの特徴を浮き彫りにする意味でも必要とされる作業であろう。

[注]

- 1) 日本語では「経済開発」「政治発展」というように、developmentを訳し分けるが、本稿では、英語の development、タイ語のパッタナー (phatthanaa) を「開発」の訳語に統一する。
- 2) 代表的なものとして [Chatthip (1991) 1997] [スリチャイ 1996] など。[Chatthip (1991) 1997] に代表される共同体開発理論の言説批判として [北原 1996] がある。
- 3) 本稿では開発政策を開始したサリット政権と、それを継承したタノーム政権時の1958年から1973年を「開発の時代」と呼ぶこととする。
- 4) 開発学については [Escobar 1984] [Cooper and Packard eds. 1997] を参照のこと。また、タイの開発学と開発の関係については [河村 2000] を参照されたい。
- 5) マーライの経歴、業績については [Uthai, Prathaan 1985]、および記念誌 *Thiiraluk Waiyawuthi Booribuun 60 Pii Saattracaan Dr. Maalai Huwanan lae Saattracaan Kunying Ubon Huwanan* を参考にした。
- 6) NIDAの各学部の内容、学生の詳細、研修機関としての役割、外部機関との関係等、詳細については [河村 2000] を参照されたい。また、当時の NIDA についてのレポートとして [北原 1971] がある。
- 7) タイの経済学の変遷については [Chatthip 1981] [Naphaapoon 1988] [末廣 1990] を参照のこと。
- 8) アメリカの政策とタイの行政援助の関係については [橋本 1982] が詳しく分析している。
- 9) CAG の歴史などの詳細については [Orapun 1983: 152-159] [Esman 1971] を参照のこと。
- 10) リッグスの「開発行政」については [Riggs 1971b] も参照のこと。
- 11) 当時のリッグスのCAG、タイとの関わり等については [Riggs 1999] を参照した。

- 12) 本人からの聞き取り（2000年9月12日、NIDA）。
- 13) このセミナーについての詳細は [Amoon, Khattiya eds. (1965) 1972: [12]–[13]] を参照のこと。これはこのセミナーを基にした論文集であり、1965年に出版され、1972年には改訂版が出されている。
- 14) 当時のNIDA教員（パトム・マニロート、パイブー・チャーンリアン、アモーン・ラックサーサット、ウタイ・ラオハウイチアン）への聞き取り（2000年9月8日、12日、15日、NIDA）。
- 15) このようなリッグスの思想の影響は開発経済学部でも共有されていた [Phairat 1971: 7-9]。
- 16) チュップはNIDA第3代学長である。チュップの経歷については [Uthai, Prathaan n.d.] を参照した。
- 17) Agents of Changeの語を使う場合もあるが、本稿ではChange Agentに統一した。
- 18) 当時のNIDA教員（パトム・マニロート、パイブー・チャーンリアン、アモーン・ラックサーサット、ウタイ・ラオハウイチアン）への聞き取り（2000年9月8日、12日、15日、NIDA）。

文献リスト

- 足立明 1996. 「開発——語りと実践」『総合的地域研究：世界と地域の共存』15: 52-54。
- Amoon Raksaasat 1963. "Patthanaa Phatthanaasaat lae Ratthaprasaatsanapatthanaa" *Rattha-prasaatsanasaat (Thai Journal of Public Administration)*, 3(3): 393-410.
- [1965] 1972. "Krabuan Kaanphatthanaa" Amoon Raksaasat lae Khattiya Kannasut eds., *Thritsadii lae Naewkhwaamkhit nai Kaanphatthanaa Pratheet*, 2nd ed. Bangkok: Sathaaban Bandit Phatthanaborihaansaat, 1-34.
- [1965] 1972. "Kaanwaang Paomaai khoong Kaanphatthanaa Pratheet Thai", Amoon Raksaasat lae Khattiya Kannasut eds., *Thritsadii lae Naewkhwaamkhit nai Kaanphatthanaa Pratheet*, 2nd ed. Bangkok: Sathaaban Bandit Phatthanaborihaansaat, 909-1003.
- 1969. "Khamnaenam Kaanpathibat Ngaan khoong Aacaan Khana Ratthaprasaatsanasaat" *Thiiraluk Nuang nai Ookaat Wai Khruu lae Toon Rap Naksuksaa Mai Pracam Pii Kaansuksaa 2512*, Bangkok: Sathaaban Bandit Phatthanaborihaansaat, 31-63.
- n.d. "Saattraacaan Dr.Chup Kaancanaprakoon Nakborihaan Niranaam", Uthai Laohawicien, Prathaan Khongritthisuksaakoon eds., *Kaanborihaan Ratthakit: Botkhwaam Thaang Wichaakaan Anusoon dae Saattraacaan Dr.Maalai Huwanan lae Saattraacaan Dr. Chup Kaancanaprakoon Thiiraluk Khrop 30 Pii Khana Ratthaprasaatsanasaat*, Bangkok: Sathaaban Bandit Phatthanaborihaansaat, 371-381.
- Amoon Raksaasat, Khattiya Kannasut eds. [1965] 1972, *Thritsadii lae Naewkhwaamkhit nai Kaan-phatthanaa Pratheet*, 2nd ed. Bangkok: Sathaabanbandit Phatthanaborihaansaat.
- Cakrit Nooranitiphadungkaan 1969. "Kaanphatthanaa Laksuut Thaang Phatthanaborihaansaat: Karanii khoong Khana Ratthaprasaatsanasaat Sathaaban Bandit Phatthanaborihaansaat." *Phatthanaborihaansaat (Thai Journal of Development Administration)*, 9(1): 227-247.
- Chaianan Samutwaanit 1997, *Chiiwit Thii Luak Dai*, Bangkok: Samnakphim Phuu Catkaan.
- Chairat Charoensin-o-larn 1997a. *Kaanborihaan Ratthakit Priapthiap: Bot Samruat Phromdaen haeng Khwaamruu Naewwiphak*, Bangkok: Thammasaat University.
- 1997b. *Ratthasaat Kaanborihaanratthakit Thritsadii: Nungthotsawat Ratthasaat Naew-wiphak*, Bangkok: Krirk University.
- 1999. *Waathakam Kaanphatthanaa: Amnaat Khwaamruu Khwaamcing Eekkalak lae Khwaampen-uun* (Development Discourse), Bangkok: Krirk University.
- Chatthip Naatsuphaa lae Khana 1981. *Seetthasaat kap Prawatisaat Thai*, Bangkok: Samnakphim Saangsan.

- [1991]1997. *Watthanatham Thai kap Khabuwan Kaanpliengplaeng Sangkhom*, 4th, Bangkok: Chulalongkorn University.
- Chup Kaancanaprakoon [1965] 1972, "Kaan Borihaan Phatthanaa Taam Withii Suksaa khoong Riggs" Amoon Raksaasat lae Khattiya Kannasut eds., *Thritsadii lae Naewkhwaamkhit nai Kaanphatthanaa Pratheet*, 2nd ed. Bangkok: Sathaaban Bandit Phatthanaborihaansaat, 197-231.
- Cooper, Frederick and Packard Randall eds. 1997. *International Development and the Social Sciences: Essays on the History and Politics of Knowledge*, California: University of California Press.
- Crush, Jonathan ed. 1995. *Power of Development*, London: Routledge.
- Escobar, Arturo 1984. "Discourse and Power in Development: Michel Foucault and the Relevance of his Work to the Third World", *Alternative*, 10(3):377-400.
- 1995. *Encountering Development: The Making and Unmaking of the Third World*, Princeton: Princeton University Press.
- Esman, Milton J. 1971. "CAG and the Study of Public Administration", Fred W Riggs, ed., *Frontiers of Development Administration*, Durham: Duke University Press, 41-71.
- Ferguson, James [1990] 1997. *The Anti-Politics Machine: "Development," Depoliticization, and Bureaucratic Power in Lesotho*, 4th ed., Minneapolis: University of Minnesota Press.
- 橋本卓 1982.「アメリカの援助政策とタイ官僚制—タイへの行政援助を中心に—」『同志社法学』34(1): 82-105, 34(2): 62-94 (222-254)。
- Henderson, Keith M. 1967. "The Development Administrator as an Agent of Change", *Phatthana-borihaansaat* (Thai Journal of Development Administration), 7 (1): 157-162.
- Katz, Saul M. 1968. "A Model for Educating Development Administrators", *Public Administration Review*, 28 (6): 530-538.
- 河村雅美 2000.「タイにおける『開発』の再生産—サリット体制(1958-1973)における官僚の回路を中心に—」『一橋研究』25(3): 117-141。
- Khana Ratthamontri ed. 1964. *Pramuan Sunthoonraphot khoong Coomphon Sarit Thanarat, Phoo Soo. 2505-2506*, Bangkok: Samnak Thamniap Naayok Ratthamontri.
- 北原 淳 1971.「タイ国開発行政研究所」『アジア経済』12(7): 113-117。
- 1996.『共同体の思想 —村落開発理論の比較社会学—』世界思想社。
- Krom Witheet Sahakaan Kraswang Phatthanaakaan haeng Chaat 1966. *Kamnoet Sathaaban Bandit Phatthanaborihaansaat*, Bangkok: Kraswang Phatthanaakaan haeng Chaat.
- 李鐘元 1996.『東アジア冷戦と韓米日関係』東京大学出版会。
- 町村敬志1999.「『豊かさ』の語りの行方—『地域開発』という思考の転機—」『都市問題研究』51(2): 78-108。
- Nakharin Meektrairat ed. 1999. *Ratthasaat-Kaanmuang: Ruam Botkhwaam Wichaakaan Thaang Ratthasaat Phoo. Soo. 2492-2515*, Bangkok: Samnakphim Wiphaasaa.
- Naphaapoon Atiwaanichayapong 1988. *Patthanaakaan Khwaamkhit Seetthasaat Kaanmuang Thai Tangtae 2475- patcuban*, Bangkok: Chulalongkorn University.
- National Institute of Development Administration 1970. *Curriculum Requirements of the National Institute of Development Administration 1970*.
- Orapun Juasiripukdee 1983. "A Case Study of the American Technical Assistance to the National Institute of Development Administration (NIDA) in Thailand" (Ph.D. Dissertation, Indiana University).
- Phaibuun Chaangrien 1971, *Laksana Sangkhom lae Kaanpokkhroong khoong Thai*, Bangkok: Sathaaban Bandit Phatthanaborihaansaat.
- Phairat Krisanamit 1971, *Patthanaakaan Seetthakit Buangton*, Bangkok: Khana Phatthanaakaan Seetthakit Sathaaban Bandit Pathanaborihaansaat.
- Riggs, Fred W. 1961a. "A Model for the Study of Thai Society" *Thai Journal of Public Administration*,

- 1(4): 83-125. Reprinted in: Riggs, Fred W. 1964. *A Model for the Study of Thai Society*, Bangkok: Institute of Public Administration, Thammasat University.
- 1961b. *The Ecology of Public Administration*, Bombay: Asia Publishing House.
- 1966. *Thailand: The Modernization of a Bureaucratic Polity*, Honolulu: East-West Center Press.
- 1971a "Introduction", Fred W. Riggs ed., *Frontiers of Development Administration*, Durham: Duke University Press, 3-37.
- 1971b. "The Context of Development Administration", Fred W. Riggs ed., *Frontiers of Development Administration*, Durham: Duke University Press, 72-108.
- 1999. "Comparative Public Administration: The CAG Experience" Intellectual Odyssey: An Autobiographical Narrative, <http://www2.hawaii.edu/~freder/> (November 14, 2000).
- 櫻井義秀 1995. 「近代・開発の言説支配と対抗的社会運動」『現代社会学研究』8: 28-59。
- 1999. 「東北タイ地域開発に果たす僧侶の役割」足立明編『開発言説と農村開発：スリランカ、インドネシア、タイの事例研究』(平成8年度～平成10年度科学研究費補助金(国際学術研究)研究成果報告書) :53-129。
- Samnak Bannasaan Kaanphatthanaa Sathaaban Bandit Phatthanaborihaansaat 1966. *Pramuan Bot Wiphaakwicaan Nangsuu Problems of Politics Administraion in Thailand dooi Joseph L. Sutton, ed.*, Bangkok: Sathaaban Bandit Phatthanaborihaansaat.
- Sanee Caamarik 1994. "Naew Khwaamkhit nai Kaanphatthanaa Seetthakit Sangkhom lae Kaanmuang", Sanee Caamarik, *Sangkhom Thai kap Kaanphatthanaa Thii Koo Panhhaa*, Bangkok: Khroongkaan Catphim Khopfai, 191-214.
- Sanit Samakkaan 1967. "Sap Phatthanaborihaansaat (Development Administration Glossary): Phuunam Khwaam Plienplaeng (Agents of Change)" *Phatthanaborihaansaat (Thai Journal of Development Administration)*, 7 (1): 163-167.
- 末廣昭 1990. 「経済思想—タイの経済学と経済開発政策」『講座東南アジア学 第6巻 東南アジアの思想』弘文堂, 255-276。
- 1993a 「タイ経済論の諸問題—5つの論点」『アジア研究』39(2) : 51-65。
- 1993b. 『タイ 開発と民主主義』岩波新書。
- 1998a. 「開発主義とは何か」『20世紀システム4 開発主義』東京大学出版会, 1-10。
- 1998b. 「発展途上国の開発主義」『20世紀システム4 開発主義』東京大学出版会, 13-46。
- スリチャイ・ワンゲーク 1996. 「脱開発主義の社会運動」『立命館国際研究』9(2): 129-134。
- Sutton, Joseph L. ed. 1962. *Problems of Politics and Administration in Thailand*, Bloomington: Indiana University.
- タック・チャルームティアロン【玉田芳史訳】 1989. 『タイ—独裁の温情主義の政治』井村文化事業社。
- Thittayaa Suwannachot [1965] 1972. "Kaanplienplaeng Thaang Sangkhom Thai", Amoon Raksaasat lae Khattiyyaa Kannasut eds., *Thritsadii lae Naewkhwaamkhit nai Kaanphatthanaa Pratheet*, 2nd ed. Bangkok: Sathaaban Bandit Phatthanaborihaansaat, 622-650.
- Thittayaa Suwannachot lae Koongwichai lae Pramoen Phon Krom Kaanphatthanaa Chumchon 1967. *Phatthanaakoon: Khwaamkhaatwang Botbaat khoong Phaithanaakoon Khanakanmakaan Phatthanaa Muubaan lae Caonaathii Radab Ampoe*, Bangkok: Krom Kaanpokkhroong.
- Uthai Laohawichien 1986. "Pratyaa khoong Laksuut Mahaabandit Thaang Ratthaprashaatsanasaat nai Adii lae Patcuban" Khanakanmakaan Prapprung Laksuut Parinya Thoo, *Kaanphatthanaa Laksuut Mahaabandit Thaang Ratthaprashaatsanasaat Pratyaa lae Phon Kaanwicai*, Bangkok: Khana Ratthaprashaatsanasaat Sathaaban Bandit Phatthanaborihaansaat, 1-38.
- Uthai Laohawicien, Prathaan Khongritthisuksaakoon eds. n.d. *Kaanborihaan Ratthakit: Botkhwaam Thaang Wichaakaan Anusoon dae Saattraacaan Dr. Maalai Huwanan lae Saattraacaan Dr. Chup Kaancanaprakoon Thiiraluk Khrop 30 Pii Khana Ratthaprashaatsanasaat*, Bangkok: Sathaaban

タイの「開発の時代」(1958-73年)における開発思想

Bandit Phatthanaborihaansaat.

[個人の記念誌]

Thiiraluk Waiyawutthi Booribuun 60 Pii Saattracaan Dr. Maalai Huwanan lae Saattracaan Kunying Ubon Huwanan.